

「お前を味見してみてもいいか？伊吹。」

伊吹はベルゼブブの発言を聞いた次の瞬間立ち上がると急いで冷蔵庫の前から離れた。ベルゼブブは食欲の権現とも呼べる存在だったから非常に分かりにくい言葉を使うが、体温が上がってきた事実や言葉の端々を聞けばゴールドヘルファイアイモリ・シロップの影響で欲情していることは明らかだった。

「どうしたんだ？伊吹。」

急に冷蔵庫の前から離れた伊吹を見つめながらきょとんとした顔でベルゼブブはそう言ったが、ついぞさっきゴールドヘルファイアイモリ・シロップの影響で欲情したサタンの衝動を止めてきた伊吹の目には、ベルゼブブの目が欲情していた時のサタンと同じ目の前にいる人間の女を求める物であることがよく分かっていた。

「べー！私なんか味見しても絶対美味しくないから！」

伊吹が緊張のあまり声を裏返しながらそう言うとベルゼブブは驚いた顔でまばたきをしてから大いにまじめな顔になった。

「それは味見をしてみなきや分からない。」

きっぱりとそう言い切ったベルゼブブを見て伊吹はなんとかベルゼブブの気をそらすことができる物がないかと慌てて自分の周りを見た。

しかし台所はきっちりと掃除がなされ、普段だったらある程度食品棚に保管してあるはずの保存食材すらなかった。

ベルゼブブは冷蔵庫のドアを閉めるとすっと立ち上がった。

「頼む伊吹、今俺は腹が減って死にそうなんだ。」

グウウウウというベルゼブブが心底腹をすかせた時の音が台所に響いた。

伊吹は一步、また一步と後ずさりながらベルゼブブとの距離を取っていったが、伊吹が動けばベルゼブブもまた同じ数だけ伊吹に向かって歩いた。

ベルゼブブがクンクンと鼻を鳴らしながらまた一步步みを進める。

伊吹は警戒心に染まっているのを悟られないようにできるだけこやかな笑顔をベルゼブブに向けていたが、その足は再び後ろに下がっていった。

ドン